

第 15 回日本古典文学学術賞選考講評

館野文昭氏『中世「歌学知」の史的展開』

(花鳥社、2021 年 2 月刊)

鎌倉時代初期から室町時代末期までの、歌学により獲得された知識全般を「歌学知」と定義し、その生成・流通・伝搬の実相を、文献学的な検討を主な手段として、具体的に描き出したスケールの大きな労作である。

検討は、あまり顧みられることのない文献にまで及び、その価値を妥当に開示している。文献の分析も書誌学・文献学的に精緻を極め、現在の和歌文学研究において最も顕著な進展を見せている和歌関連の文献分析の分野の、最先端に位置するレベルにあると言えよう。そうした研究は特に若手研究者により精力的に進められているが、この研究成果は、その先導的な位置にある。特に本書の第三部・第四部で分析された、冷泉家庶流の「歌学知」の生成と流通の様態を記述した部分は、他の追隨を許さない圧巻の成果である。

しかしながら、「歌学知」として扱われるものが、具体的な言葉や語法など、明証的なものであることは悪くないのだが、それが「知」と呼ばれるにふさわしい内実をもつものであるのかどうかは、もう少し説明が必要であろう。あえて、歌学ではなく、「歌学知」として普遍化する以上は、歌人達の営みを越えて、少なくとも中世やそれ以後における他のジャンルの文学生成に関与しなくてはならないはずである。第五部は「説話と歌学知」として、説話的な展開について、行基婆羅門説話や金源三説話などの考究の章が設けられ、そのことが説明されようとしているが、さらなる考察が欲しい。

選考委員会でもそのことは活発に議論されたが、例えば近世文学の中世古今注釈からの影響などを考える場合、ここでの成果が確実に「知」として役立つという意見をはじめ、それぞれの研究分野で、この書から読み出せることは多く、「知」と呼ぶにふさわしい内実は多くを読み手に委ねるとはいえ、そのように命名されるべきことを開示し得ている成果であることは確認された。

その他、選考委員会では、いくつかの問題点が議論されたが、この書の最後に示された、今後の課題として提示された内容に多くが関わるものであり、著者自身も自覚している問題であり、「知」の問題も含めて、この豊かな成果への更なる期待という性格の議論でもあった。逆に、この書の学術的な貢献度の高さの揺るぎなさが確認されるという性格の議論でもあった。したがって、選考委員会は一致して館野氏に、日本古典文学学術賞を授与することを決定した。

(文責 村尾 誠一)